

校長先生の部屋だより

哲学ルームだより



この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。

附属も昨日後期の始業式がありました。教育実習生もたくさん学びにきています。今日はいつもの生徒が訪ねてきました。

—今日はどんな問いを持ってきたの？

A:うーん。

—じゃあ、僕の方から質問してもいいかな。ある人間の記憶が、身体はそのままに別の身体、これは別にロボットでもいいんだけど、そっちに移ったとする。本の身体は完全に記憶を失っている。どっちをその人間と認める？

A:記憶を失った方に過去の記憶を教え込んでも、それはコピーで本物じゃないから、記憶を失った方は本物にはなりません。

—例えばお母さんが姿形はそのまま、完全に記憶を失っている、これはお母さんじゃない？昔のことはちゃんと覚えているけど、姿形がまったく違う人をお母さんと認める？

A:うーん。過去の記憶を過去の記憶そのままに再現できるように教え込めば、本物になれるかもしれない。さっき言ってたのは間違いでした。

(しばらく考え込んでいる様子)

—少し質問を変えようか。君自身が朝起きたとき、昨日までの記憶をまったく失っていたとする。君は本の君だろうか。

A:どういう状況ですか。

—朝起きたら突然今までの記憶を全部失っていた、そういう状況だ。君はまず何を考える？

A:ここはどこで、自分は誰かを考えるとします。

—そうだろうね。そうだとすると、記憶というのは自分と大きな関わりがありそうだ。

A:でももともと僕はお父さんとお母さんから生まれて、そこからいろいろな記憶が積み重なっているんだから、僕はもともといるんだと思います。

—うーん。そうだとするとまず身体という物がまずある、という考えになるね。さあ、もう時間だ。また考えてきてね。

